

## 「コザ学校」から学ぶ ～兄弟都市交流に携わって～

田中 逸郎  
元・豊中市副市長

始まりはコザロックだった。沖縄市の中央パークアベニュー<sup>1</sup>にあったライブハウス。1986年、沖縄戦の取材<sup>2</sup>で訪れた時だった。案内してくれた沖縄市職員のMさんは、半分ウチナーグチ（沖縄言葉）、半分英語で入場料を尋ねドル札で支払った。本土復帰して10年以上が経つのにドル?…中に入ってもっと驚いた。強烈なビートが大音量で響いていた。迫力あるライブ演奏にしばし唖然となる。こんなロックは聴いたことがなかった。店内にいる客はほぼ米兵たち、歓声をあげ体を揺らしている。僕が「アメリカ世ですね」と聞きかじった生半可な知識で言うと、Mさんは「豊中で沖縄戦の展示会やって聞いたけど」とポツリ…若造の僕を諭しているのか、励ましているのか、ただほほ笑むだけだった。嘉手納基地の門前町・コザの洗礼をいきなり大音量で浴びたこと、これが僕の交流の始まり、きっかけである。

それから10数年後、「沖縄

全島エイサーまつり」を訪れた。沖縄県内各地のエイサーが披露される晴れ舞台だ。毎年、あふれかえる観客の前で、先祖の霊を供養するという格式を守るものからニューウェーブのものまで、次々とエイサー隊が登場する。伝統芸能が、変貌しながらも脈々と息づいていることを目の当たりにしてきた。1999年には、本土のエイサー隊が沖縄市のご尽力で出演することができた。豊中まつりに沖縄市青年会のエイサー隊を招き、舞台での演舞と道ジュネー（まちを練り歩きながら演舞）をしていただいたこともある。



「沖縄全島エイサーまつり」に出演した本土のエイサー隊「琉鼓会」（1999年）

※1 かつては「センター通り（BUSINESS CENTER STREET）」と呼ばれる商業地・歓楽街だったが荒廃し、1985年に再開発事業で「中央パークアベニュー」に生まれ変わった。1987年には建設省（現・国土交通省）から手づくり郷土賞を受賞。シャッター通りとなった時期もあったが、現在は若手起業家らの力で活気が戻ってきている。

※2 豊中市は1983年に「非核平和都市宣言」、以来平和事業に取り組んでいる。担当職員だった筆者は、1986年、沖縄戦をテーマにした戦争資料展を開催するため、沖縄市へ協力依頼と取材で訪問した。

さらに「ピースフルラブ・ロックフェスティバル」。かつて闘牛場だった沖縄市会場で、コザロックの大御所や若手が演奏とパフォーマンスを繰り広げてきた。豊中まつりのコンテストで選ばれた本土のバンドが出演すること、また、沖縄のバンドが豊中まつりに出演することも恒例となっている。



1988年に開催された「ピースフルラブ・ロックフェスティバル」

現在は「コザ・ミュージックタウン」<sup>3</sup>1階の屋外広場が会場となり、多種多様な人たちが集う。オーバー・オジー（高齢者）もいれば、親子連れの家族、もちろん米兵やその関係者たちもいる。みんな、ガツンと響いた演奏へは歓声を上げる…ロックはコザに根付き、多世代・多国籍に広がっている。本土ではありえないことだ。

この他にも、挙げるときりがないのだが、三線が奏でる沖縄民謡や組踊、沖縄音階を取り入れたニューミュージックなど、さまざまなチャンプルー文化を沖縄で体感し、豊中市にお招きしてきた<sup>4</sup>。沖縄芸能は、今や豊中まつりに欠かせない風物詩となっている。

これら全て、コザの方々との出会いとつながりのおかげだ。多様な交流の積み重ねから、いつしか僕の中で戦争と平和、チャンプルー文化と人々の暮らしがひとつの輪の

ように結び付いていき、兄弟都市交流の価値は「多様性と共生」にあると思うようになった。違いがあっても困難を抱えていても、いや、違いがあつて困難を抱えているからこそ、人はつながっていくことができるのだと。

### 「霊石」と「豊中学校」が結んだ交流

交流の歩みを振り返ろう。自治体間の交流提携は、姉妹都市と呼ばれる例が多い。両市は違う、兄弟都市だ。「いちやりばちょーでー」とは沖縄の言葉で「出会えば兄弟」という意味だが、豊中市と沖縄市が出会い、ちょーでー（兄弟）となったのだ。この、なんとも不可思議な関係はどのようにして生まれたのか。

そのきっかけは、1964年までさかのぼる。本土復帰前のコザ市（現・沖縄市）の大

※3 多目的音楽施設。2007年、沖縄市が音楽によるまちづくりを展開するための拠点施設として開設した（中の町再開発事業の一環）。

※4 豊中市に招いたプロ・ミュージシャンには、照屋林助さん、照屋林賢さん・上原知子さん（りんけんバンド）、知名定男さんとネーネズらがいる。この他、ウチナーグチ（沖縄言葉）の芝居を立ち上げた玉城満さんや青年会のエイサー隊にも来ていただいた。

山朝常市長と豊中市の竹内義治助役（後に豊中市長）の出会いから始まる。沖縄戦で3人の子どもを亡くしている大山コザ市長<sup>5</sup>は、沖縄戦で亡くなった豊中出身の兵隊の遺族へ、形見・遺品のかわりとして、摩文仁の海岸で石を集め「霊石」とし、仏桑華（ハイビスカス）を添えて豊中市に届けた。

「霊石」のプレゼントに深く感銘を受けた竹内豊中市助役から、返礼のプレゼントが大山コザ市長に提案された。コザ市職員を豊中市に受け入れ、本土復帰に備えてまちづくりに必要な人材育成を支援するという申し出だった。こうして1965年からコザ市職員の受け入れが始まった。コザ市では「豊中学校」と名付けられ、毎年、コザ市職員は3か月から長い人で1年以上にわたり、豊中市職員と共に働きながら地方自治制度を学んだ。この関係から、いつしか「ちよーで一（兄弟）」と呼び合うようになったのではないか<sup>6</sup>。他の自治体交流では考えられない稀有な取り組みで、延べ100人以上のコザ市職員が「豊中学校」に入学した。卒業生の多くはコザ市の幹部となり、1972年の本土復帰直後からいち早く自治体行政に取り組むことができたという。

こうして兄弟の契りが結ばれていった。そして1974年、コザ市が美里村と合併して沖縄市となった際に、兄弟都市提携が結

ばれた。先人たちの平和への思いとそれをつなげ確かなものにしていこうとする人材交流の取り組みから兄弟都市が誕生したのだ。「霊石」と「豊中学校」はその象徴、この年に就職したばかりの僕は何にも知らなかったのだが。

### 交流のルーツを探る「霊石」

そもそも「霊石」とは何だろうか。沖縄市史に掲載された北村毅さんのコラム（16ページ参照）によると、「死没地と郷里をつなぐ戦死者の魂の依り代」として、遺骨の代わりに戦没地の石や土を持ち帰ることから始まったという。それが、本土の遺族の思いに



霊石

※5 後日談になるが、1971年に豊中市からコザ市に贈られた彫像「少年の像・合奏」の除幕式での出来事。彫像には男の子2人と女の子1人が合奏している姿が描かれており、大山市長は、亡くされた子どもの数も構成も同じことから、涙があふれて止まらなかったという。「少年の像・合奏」は「沖縄こどもの国」のメインゲート付近に設置されており、今も平和の大切さを語りかけている。

※6 「豊中学校」に入学したコザ市職員も、受け入れ指導した豊中市職員も全て男性だったことから互いを「兄弟」と呼び合ったのだろう。都市間交流提携を姉妹とか兄弟と表現するのは、ジェンダー平等の観点から気になる方もいるかもしれない。近年は「友好都市」という名称が多いようだ。

えようという「沖縄の霊石を贈る運動」へと発展したとある。こうした草の根の活動があるなか、1964年、大山コザ市長は「沖縄戦没者慰霊奉賛会（現・沖縄県平和祈念財団）」の協力のもと、摩文仁の海岸で石を集め、白木の箱に収めて豊中市へ贈っ

た<sup>7</sup>ということだ。

この北村毅さんのコラムを読んだとき、本文に出てくる「沖縄戦没者慰霊奉賛会（現・沖縄県平和祈念財団）」という文字が僕の中に飛び込んできた。1986年の沖縄戦の取材の際、沖縄市の紹介状を持って、

### 「霊石」としてのサンゴ石

そのはら けん  
園原 謙

（前沖縄県立博物館・美術館主任学芸員）

1958年国頭村生まれ。琉球大学卒。平和祈念資料館を皮切りに、県文化財保護行政、博物館行政（新博物館建設）を経て新平和祈念資料館学芸主幹に着任。2009年から今日まで JICA のカンボジアの「平和博物館」の人材育成に係わる。県立博物館・美術館副参事兼博物館班長で2019年定年退職。2024年3月で博物館の主任学芸員の再任用満了。現職沖縄県文化協会事務局長



多くの命の喪失や大惨事が起きた場所には、その地で失われた命を鎮魂するために鎮碑が建立される。沖縄ではそれを「慰霊塔」と呼ぶ。県内には46都道府県戦没者の慰霊塔をはじめ集落、市町村、学徒、機関単位で数百基の慰霊塔が建つ。魂魄の塔（1946年2月）とひめゆりの塔（同年4月）はその嚆矢である。戦後すぐに着手できなかったのは人々が数か月間、住民収容所に隔離されことによる。生還した人々が最初に手がけたことが収骨作業と慰霊塔づくりだった。

戦前の沖縄の死者の弔い方は墓中内に

遺体を置き、数年後洗骨し納骨器（ずし）に収納する習わしだった。厨子内の遺骨は33年を経て大きな石棺（沖縄では「池」と呼ぶ）へ移し、骨は石棺内で先祖たちと一体化する。そこはまるで小さな白い砂浜のようであった。学生の頃、門中墓（父系親族の構成員の墓）の民俗調査時の印象だ。

戦前生まれの大山朝常さんが白いサンゴ石を遺骨の代替物としたのは、色形も骨に近似していることに加え、沖縄の葬礼の文化的背景が影響したように思える。故郷から遠く離れた南の地で、無念の死を遂げた旧日本兵たち。遺族の心情に寄り添ったチムグクル（肝心）が平和文化交流の原動力になった。



2000年に新資料館が開館した。その西側には1975年開館した旧資料館があった。（2000年撮影）

※7 豊中学校1期生の幸地さんの手記によると、「霊石は豊島公園（筆者注：豊中市の公園で、豊中まつりの会場）内に慰霊塔を建立して納められ…」とある（同人誌『談笑』沖縄市・談笑会編集・発行、2011年第15号）。兄弟都市提携50周年を迎えるにあたって、豊中市は霊石の追跡調査を行っているが、現在のところ新資料は出てこない。

この財団が運営する「沖縄県平和祈念資料館」<sup>※8</sup>を訪れている。そして、当資料館学芸員の園原謙さんのご尽力で、沖縄戦の写真や資料などを借用することができた(沖縄市の紹介・仲介と同館からの資料提供がなかったら、戦争資料展は開催できなかったろう)。

そうだ、「沖縄県平和祈念資料館」に霊石の資料があるかもしれない。さっそく問い合わせたが、ないとの返事。次いで園原さんに連絡、2023年、およそ37年ぶりに再会した。当時「財団法人沖縄県戦没者慰霊奉賛会」職員だった園原さんは、再会時には那覇市にある「沖縄県立博物館・美術館」の主任学芸員、霊石についての調査をお願いした。その結果、大山コザ市長が設立当初の奉賛会の理事をしていたことなど貴重な情報を提供いただいたが、残念ながら、1964年当時のコザ市の霊石収集に関する資料は残っていないとのことだ。

いろいろ調査を重ねてきたが、今、改めて思う。沖縄戦をテーマに戦争資料展が開催できたのは「霊石」のおかげだ。沖縄市の取材協力も、平和祈念資料館からの資料借用も「霊石」のご縁から。「霊石」は戦争と平和、過去と現在、人と歴史をつなぐ象徴として、語り継いでいかなければならない。

## 交流のルーツを探る「豊中学校」

霊石の調査と並行しながら、文献・手記などをもとに「豊中学校」の調査を開始。2023年9月、第1期生の幸地光英さんと面談することができた。幸地さんは1936年生まれ、測量技師として米軍基地整備の仕事を経て、1960年にコザ市に入職。1965年、「豊中学校」で6か月にわたり都市計画や区画整理事業業務に従事して研鑽<sup>けんさん</sup>を重ねたという。「豊中のご恩は一生忘れることはない」と熱く語る幸地さん、その内容を手記にまとめている<sup>※9</sup>。「豊中学校」卒業後、幸地さんはコザ市の幹部になられご活躍、沖縄市建設部長などを歴任された。今もお元気で精力的に活動されている。

「豊中学校」は1975年に閉校したが、両市職員による共同研究をはじめ、相互職員派遣交流など、現在も「人材交流」は続いている。

## 持続的交流に必要なこと

兄弟都市提携以降、「青少年少女合唱交歓演奏会」の開催をはじめ、シーサー像の贈呈(沖縄市から豊中市へ)、壁画の贈呈(豊中市から沖縄市へ)ほか、さまざまな取り組みがなされてきた。しかしながら、これ

## 「豊中学校」から学んだまちづくり

こうち みつひで  
幸地 光英

(元沖縄市建設部長)

1936年、コザ市生まれ。首里高校卒業後、測量会社技師として米軍基地整備に従事。1960年、コザ市に都市計画技手として入職。道路台帳・住居表示の整備、都市計画構想の策定などを担当。経済部長や企画部長、建設部長などを歴任した。



沖縄市が市制施行50周年を迎えた今、市職員として長年まちづくりに携わってきたことが走馬灯のようによみがえってくる。その中でも特に忘れられないのは、1965年12月、豊中市に「まちづくり研修職員」の1期生として派遣されたことだ。

派遣にあたってのコザ市の負担は一切なく、手当も宿泊先も豊中市が負担という好条件に、都市計画課区画整理係長だった私は身が引き締まる思い。しかも3か月の予定が、豊中市からの提案でさらに3か月延長いただき、感謝に心が震えた。厚遇と期待に応えるべく、土木技術だけでなく、地方行政全般について寸暇を惜しんで学び、半年で収集した資料はスクラップ帳で

23巻に及んだ。私の貪欲さに豊中市職員が音を上げる始末、懐かしい思い出だ。研修後に真っ先に取り組んだのが、沖縄県内初の道路台帳の整備と住居表示の導入だった。基地依存経済からの脱却をめざす「国際文化観光都市」づくりの第一歩を踏み出すことができた。

振り返れば「豊中学校」は私の公務員人生のターニングポイント。ゼロからのまちづくりに、豊中市からご支援・ご尽力いただいたことに万感の思いを込めて感謝をささげるばかりである。現在は、その後の両市交流に胸を熱くし、誇らしく見守っている。今年は、豊中市の中学校から修学旅行生が訪れたと聞いた。今後の交流に弾みをつける契機となることを願ってやまない。



「豊中学校」当時の様子(豊中市役所)

らは行政間交流にとどまりがちで、徐々に交流のポテンシャルが低下していった。持続的交流を続けていくためのエネルギー源、それは「霊石」と「豊中学校」が象徴する平和への思いと人材交流だが、この源泉が、両市市長の交代や時代・状況の変化によっ

て枯渇し始めたのだ。そもそも、兄弟都市交流のルーツや意義について、両市の市民に十分には伝わってこなかったのだろう。なぜなら、市民はその時々交流事業を享受する対象・客体としてしか位置づけられてこなかったからではないか。

※8 来館当時は摩文仁海岸の端にあったが、2000年に新資料館「沖縄県平和祈念資料館」が開館。現在は、同資料館は県直営で、「平和の礎」や霊域や公園全体の「県営平和祈念公園」は「公益財団法人沖縄県平和祈念財団」が指定管理者として運営管理している。

※9 前掲「同人誌『談笑』2011年第15号」に「豊中市に地方自治を学ぶ」と題し、手記が掲載されている。本書を編さんするにあたって、大変参考になった。

市民は交流の価値を創造する「主体」。交流の源泉を枯渇させず、さらに豊かにしていくことができるのは市民の活動だ。交流の真ん中に位置づけられなければならない。これは、コザのチャンプルー文化からヒントをいただき、学んだことだ。

## チャンプルー文化 ～「コザ学校」から学ぶ～

チャンプルー文化についての研究文献もあるが、ここでは、その大御所でコザを拠点に活動してきた照屋林助さん<sup>10</sup>のコメントを紹介する。

「古典の継承に躍起で身動きならなかった那覇や首里のような都会とは違って、ここいら中部は、祭る神様に名前すらないようなところ。でもそのぶん何でも許し、珍しいものは積極的に取り入れて、みんなで楽しむという土地柄。沖縄のチャンプルー文化はここが発祥の地なんです。神様が何でもやりなさいという土地なんですからね」<sup>11</sup>

コザは、<sup>せいさん</sup>凄惨な沖縄戦を生き延びた民衆、いろいろな出自や困難を抱えた人々が集まってできた嘉手納基地の門前町だ。「神様が何でもやりなさいという土地」ということは、

できることは何でもやらないと生きてこれなかった地域ということでもある。そうせざるを得なかった多様な人々の心の拠り所として、古典も民謡も洋楽も取り入れごちゃまぜにして楽しむチャンプルー文化が生まれたのではないか。価値観も生き方も違う（なかには国籍も異なる）多様な人々が、違いを認め合って共に生きる糧として育んできたのだろう。チャンプルー文化は、今も新たな若者のさまざまな表現活動を受け入れ変化し続けている。

こうしたコザの地に暮らす方々との出会いと交流から、本当にたくさんのことを学んだ。共通しているのは「誰も排除しない、みんな認め合って生きていこう」という思いとぶれないスタンスだ。コザンチュ（コザで生きてきた人々）の魂に刻まれているのではないか。多文化共生については沖縄市の「コザ学校」から学ぶことがいっぱいある。これこそが交流のキーとなるのではないか。そう言うと、彼らは異口同音に「ちよーでー」だからね、いつでもおいでよ、とほほ笑む。

## 市民交流の構築

1997年、市主催の「豊中まつり」を思い切って変えた。盆踊りと夜店で構成する夏祭りだったが、主催を市民実行委員会

※10 1929年生まれ。音楽家・漫談家として幅広く活動し、沖縄芸能へ多大な影響を与えた。芸能活動のかたわら、埋もれかけていた沖縄民謡の発掘などにも尽力。りんけんバンド・照屋林賢はご子息。2005年逝去。その功績をたたえ、毎年「コザ・てるりん祭」が開催されている。

※11 「海の民の讃歌 照屋林助・林賢親子の沖縄音楽グラフィティ」（室矢憲治、朝日ジャーナル1991年10月4日号）より。



多彩な沖縄芸能が、シーサーに乗って豊中まつり会場（豊島公園）にやってくる（1997年の豊中まつりポスター）

に変え、沖縄芸能を<sup>しょうへい</sup>招聘したのだ<sup>12</sup>。豊中の祭りに沖縄芸能？ と、あちこちから戸惑いや反発の声が上がったが、ふたを開けてみると、この「新生・豊中まつり」は大好評。10万人以上が集まる祭りへと発展していった。沖縄のメディアでも紹介され、沖縄からの来訪者、在阪の沖縄県人、沖縄大好き人間らが集い、豊中市民と交流する夏の一大風物詩となっている。

この「交流と興隆」をつくりあげたのは、企画から当日の運営まで担う市民ボランティアたち。実行委員会に結集した豊中市民の思いと熱意である。声高に「共生」を訴えなくても、市民の力と協働によって「チャンプルー文化」は海を越え交流も広がっていった。両市の少年サッカーチームのホー

ムステイ交流など、豊中まつりをきっかけに新たな交流も生まれている。2014年の兄弟都市提携40周年では、行政主催による記念事業だけではなく、市民主催の交流事業が展開されたことは特筆すべきこと。市民主体の自主的なネットワークの輪が広がり、交流が根付いてきた証ではないか。

この若者を中心とする多文化共生・多世代交流の取り組みは、行政間交流も再点火させ、両市職員による共同研究・派遣研修、ITを活用した小学校交流などが取り組まれている。

## 平和学習・交流

もう一つの交流の柱が、平和学習である。豊中市新成人の沖縄市派遣、中学生平和大使相互交流事業、沖縄から講師を招いての講演会<sup>13</sup>などが取り組まれてきた。豊中まつりに合わせ、市民主催の「コザ暴動を考える会」（講師：古堅宗光さん）が開かれたこともあった。今年は、兄弟都市提携50周年記念事業として「沖縄と豊中から考える戦争体験の継承」と題したシンポジウムなどが開催された（39ページ参照）。

これらの取り組みを通して感じたことは、戦争についての本土と沖縄の認識の違い、受け止め方の違いだ。本土では、戦争は悲惨な出来事だった、と過去形で語られる

※12 豊中市の先輩職員、本岡和巳さんのアイデアと熱意によって実現した。新生・豊中まつりの生みの親である。沖縄の知人も多く、いわばチャンプルー文化の申し子。コザ学校の首席卒業生といえるだろう。

※13 最近では「沖縄戦と戦後復興」（講師：沖縄市市史編集担当・恩河尚さん）、「ひめゆり学徒隊の＜戦後＞を考える」（講師：ひめゆり平和祈念資料館・仲田晃子さん）などを開催している。

ことが多い。かくして、あんな時代に生まれなくてよかった、今は平和でよかったとなる。沖縄は違う。沖縄戦は、体験していない戦後生まれの世代も含めて、過去の出来事としてくり封印することはできないこと、今の自分につながることで語られる。過

## 文化と平和行政

おんが たかし  
恩河 尚

(沖縄市 市史編集担当)

琉球大学法文学部史学科卒(日琉史専攻)。1983年、沖縄市教育委員会文化課採用(市史編集担当主事)後、企画部平和文化振興課副主幹(市史編集担当)、経済文化部文化振興課副主幹(市民小劇場あしびな一副館長)、沖縄市総務部総務課主幹(市史編集担当)を経て、2012年、総務部次長兼市史編集担当主幹。2014年に定年退職。現在、会計年度任用職員(総務課市史編集担当)



豊中市を初めて訪れたのは、沖縄戦の講演を依頼された時だと思う。その際、頭をよぎったのは沖縄戦の悲惨さだった。というのも沖縄観光の始まりは、戦跡巡りという形で復帰前後からブームのように行われていたからである。当然「またか」という感想をもたれるのではないかという不安があっ



ヒストリート外観

た。そこで思いついたのが、沖縄戦と本土との関係である。一例を挙げると、

去形か現在進行形か…この違いは大きいのではないか。

ここで1枚の写真をご覧いただきたい。

これは、嘉手納基地へと続くコザ・ゲート通りの写真ではない。大阪国際空港(伊丹空港)周辺の、通称「空港通り」のひと

沖縄戦は「ダウンフォール(日本上陸)作戦」の前段として位置づけられ、本土攻撃のため沖縄に飛行場やその関連施設を構築するというのが米軍にとっての沖縄戦であった。そのために多くの兵士が沖縄で命を落とし、その中に大阪府出身の方々2,300余名も含まれていた。ちなみに、私の拙い話をいつも最前列で聞いていただいたのが田中逸郎元副市長である。

田中さんも指摘するように、基地の門前町として発展したのがコザ市(現・沖縄市)であり、それは沖縄歴史上、類を見ない都市の成立であったが、その背景は沖縄戦にあった。そこに着目し、私たちは戦後をテーマにした沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」を立ち上げた。

以前に文化行政の指針ともいうべき「文化振興ビジョン」の編集を担当した時、ご指導いただいたのが、元豊中市職員だった中川幾郎先生(帝塚山大学名誉教授)。「ヒストリート」のコンセプトの一つは、先生から教わった「文化によるまちづくり」である。ただ、田中さんらが取り組んできた「地域自治、市民との協働」などについて、私たちはまだその域に達していない。

コマ、当時は「テキサス大通り」といわれていた。大阪国際空港は、敗戦からしばらくは米軍基地だったのだ。そう、コザと同様(規模は違うが)、豊中も基地の門前町だったのだ。1952年に本土は主権を回復し、その後空港は米軍から返還された。忘れてしまっている人、知らなかった人も多いだろうが、みんなで考えたい。戦争や基地について、豊中にとっては過去のこと、歴史の年表に載せておしまいでいいのだろうか。自分たちとは異なる時間を生きてきた人々、生きざるを得ない人々に思いをはせる、そこから共生の途を拓いていく取り組みが始まるのではないか。



大阪国際空港「テキサス大通り」、写真提供:北摂アーカイブス(鹿島友治寄贈)

[https://hokusetsu-archives.jp/dbs/page?id=T\\_00215520](https://hokusetsu-archives.jp/dbs/page?id=T_00215520)

これからも、平和学習と交流を通して戦争体験から学ぶ、現状を知ることを行っていくことが大切だ。兄弟都市交流の源泉は

「平和と人材交流」にあるのだから。

## おわりに ～共生と自治のまちづくり～

改めて振り返ると、交流のキーとなったのは「人と文化が織りなす共生」の取り組みだった。これがなければ、時の首長のパフォーマンスに終わるか、一部の人たちの親善交流に陥ってしまっただろう。自治体同士の交流なのだから、自治体を構成している市民も行政も共に参加することが大切だ。自治とは「自ずと治まる」ことではなく、「自ら治める」という自主的・主体的な営み、この

自治の力によって交流は活性化し根付いていく。誰もが、お互いの違いや多様な考え方を認め合いながら、共に生きることができる社会をつくる、これが交流の意義であり、目標ではないか。

市民は交流の価値を創造する「主体」。兄弟都市の源泉(平和と人材交流)に、市民による新たな湧水(多様性と共生)が注ぎ込まれたおかげで、豊中市と沖縄市は、今やどちらもが兄で

あり弟でもある関係になった。

そして、今、兄弟都市提携50周年を迎えた。未来へとつなぐ主体は、私たちだ。

筆者: 田中 逸郎

豊中市役所において、広報広聴・企画・文化・国際交流・都市デザインなどの公共政策を担当。市立生活情報センター館長、市民活動課長、教育委員会生涯学習推進室長を経て、2007年4月に政策企画部長。2010年7月から2018年6月まで豊中市副市長。2008年には、大阪市立大学大学院・創造都市研究科博士後期課程単位取得満期退学。現在、NPO政策研究所理事、コミュニティ政策学会理事、自治体学会評議員、滋賀医科大学非常勤講師など。著書に『NPOと行政の協働の手引き』(共著、大阪ボランティア協会)、『地域自治のしくみと実践』(共著、学芸出版社)、『外国人と共生する地域づくり』(共著、明石書店)、『地域自治のしくみづくり』(共著、学芸出版社)ほか

